

2016年度博士学位申請論文

環境文学の「レトリック」：  
梨木香歩と石牟礼道子の「反復」

山田 悠介

立教大学大学院  
異文化コミュニケーション研究科

# 目次

図表のリスト.....	I
宣誓書.....	II
<b>第1章 序論.....</b>	<b>1</b>
1.1 研究の概要および目的.....	1
1.2 方法論.....	2
1.3 論文の構成.....	2
<b>第2章 環境文学と「レトリック」.....</b>	<b>4</b>
2.1 エコクリティシズムと環境文学.....	4
2.2 梨木香歩と石牟礼道子の環境文学.....	6
2.3 ことばの〈かたち〉を語ること.....	8
2.3.1 〈かたち〉を読むこと、語ること.....	8
2.3.2 ことばの〈かたち〉が語ること(1):『鳥と砂漠と湖と』の「反復」.....	13
2.3.3 ことばの〈かたち〉が語ること(2):『内なる島』の「反復」.....	15
2.4 ことばの〈あや〉と「レトリック」.....	20
2.4.1 ことばの〈あや〉.....	20
2.4.2 「芸術的表現の技術」と「発見的認識の造形」.....	22
2.4.3 20世紀以降のレトリック論.....	23
2.4.4 「対比」という〈あや〉.....	25

2.4.5 「自由と荒野、荒野と自由」のレトリック	28
2.5 「弁論術」としての「レトリック」	31
2.5.1 「レトリック」の体系化と、衰退する「レトリック」	32
2.5.2 「レトリック批評」	38
2.5.3 スロヴィックの「レトリック」	41
2.6 本研究のアプローチ：「反復」を読み解くこと	44
<b>第3章 「反復」を読み解くために</b>	<b>47</b>
3.1 第3章の概要	47
3.2 「反復」という〈あや〉	47
3.2.1 音の反復	51
3.2.2 語句の反復	52
3.2.3 構成の反復	53
3.3 反復の〈かたち〉と〈意味〉	55
3.3.1 「等価性の原理」	55
3.3.2 『冬虫夏草』『ヤマユリ』の反復	57
3.3.3 「回顧的錯覚」と「反復」	62
3.4 「類像性」	65
3.4.1 類像性の概念	65
3.4.2 反復と類像性	67
3.4.3 「ヤマユリ」における二種類の類像性	69
3.4.4 作品の主題を語るキアスムス	74
3.5 「反復」と「コミュニケーション」：「6機能モデル」	78
3.6 「詩的機能」	80
3.6.1 詩的機能のメカニズム	80

3.6.2 詩的機能を手がかりに——二つの時空——	83
3.6.3 ヴァインリヒの時制論	85
3.6.4 「〈有効性の制限〉」	88
3.6.5 ヤコブソンとヴァインリヒ	91
3.7 「交話的機能」	93
3.8 第3章のまとめ	100
<b>第4章 梨木香歩の「反復」</b>	<b>101</b>
4.1 第4章のねらい	101
4.2 自然から人間への〈言葉〉、死者から生者への〈言葉〉	101
4.2.1 『西の魔女が死んだ』	101
4.2.2 植物たちの〈言葉〉	102
4.2.3 おばあちゃんの言葉	105
4.2.4 おばあちゃんからの〈言葉〉	107
4.3 人間から自然への言葉 (1) : 『ぐるりのこと』『物語を』の「反復」	111
4.3.1 夢を語る言葉	111
4.3.2 夢の反復、反復と夢	116
4.3.3 土地への祈り	118
4.4 人間から自然への言葉 (2) : 『蟹塚縁起』の反復	120
4.4.1 『蟹塚縁起』のあらすじ	120
4.4.2 「蟹」というモチーフ	123
4.4.3 「水平の言語行為」と「垂直の言語行為」	124
4.4.4 人と人ならざる存在の「コミュニケーション」	127
4.5 自然の〈言葉〉を語る〈うた〉 (1) : コウノトリの〈言葉〉	129
4.5.1 『エストニア紀行』	130
4.5.2 鳥の〈ふり〉	133

4.5.3 歌を歌うということ.....	134
4.5.4 「主体の二重化」と〈変身〉.....	136
4.6 自然の〈言葉〉を語る〈うた〉(2) : クビワキンクロの〈言葉〉.....	139
4.7 「主体の二重化」と交感論.....	145
4.7.1 〈交感〉の概念.....	145
4.7.2 「人間の自然化」.....	147
4.7.3 「〈見え〉先行方略」.....	149
4.7.4 相手に「なって」分かること.....	151
4.7.5 「主／客を撚り合わせる」ということ.....	153
4.7.6 「越境する」ということ.....	156
4.8 第4章のまとめ.....	157
<b>第5章 石牟礼道子の「反復」.....</b>	<b>159</b>
5.1 第5章のねらい.....	159
5.2 反復すること、「相手の身になる」こと.....	161
5.2.1 みっちんとおもかさまのやりとり.....	161
5.2.2 「相手の身になる」こと、「他者」と交わること.....	164
5.2.3 「コンスタンチノーブル」と「コン・ツ・タンツ・ノーバ・ロ」.....	166
5.3 「反復」と交話的機能.....	168
5.3.1 くり返される「七つの子」.....	168
5.3.2 くり返される夫の言葉.....	173
5.4 みっちんの〈変身〉——「反復」の「反復」——.....	176
5.4.1 みっちんとおぎん女.....	176
5.4.2 邂逅と〈変身〉.....	178
5.4.3 「うた状態」と「人間の自然化」.....	181

5.5 「草のことづて」をめぐる三つのテキスト .....	183
5.5.1 「草のことづて」 .....	184
5.5.2 「名残りの世」 .....	185
5.5.3 「人間に宿った自然」 .....	188
5.6 「想像的相互行為」の生成と「反復」 .....	191
5.7 第5章のまとめ .....	195
<b>第6章 結論と今後の展望.....</b>	<b>197</b>
6.1 結論および本研究の意義.....	197
6.2 本研究の課題と今後の展望.....	200
<b>参考文献.....</b>	<b>203</b>
<b>謝辞.....</b>	<b>222</b>

## 要約

環境文学（人間と自然の関係性を主題とする文学）には、人と、自然や超自然の存在とのあいだの、さまざまな「コミュニケーション」が描き出されている。本研究では、現代日本を代表する環境文学作家、梨木香歩と石牟礼道子の作品のなかで、人と人ならざる存在の「コミュニケーション」が描かれる際に、音、語、語句、構文、文といった多様なレベルの「反復」が頻出することに着目し、両作家の環境文学テキストを詳細に分析することを通して、人と人ならざる存在の「コミュニケーション」の成立とその描出における「反復」の役割を解明することを試みた。

本研究が検討に付す、文学における人と人ならざる存在の関係および「コミュニケーション」をめぐる問題は、「エコクリティシズム」と呼ばれる文学研究の一分野で研究が行われている。ただし、従来のエコクリティシズムでは、文学テキストの「内容」や「コンテキスト」に目が向けられることが多く、表現形式や言葉そのもの、別言すれば、「いかに言われているか」という側面から環境文学が論じられることは少ない。

本研究では、こうした研究状況を踏まえた上で、文学の表現形式そのものも何らかの「意味」や「機能」をもち、それを「読む」ことが可能であるという立場から、上に挙げた二人の作家の環境文学テキストに描かれた、人と人ならざる存在のあいだの「コミュニケーション」の場面を、文学、言語学、レトリック論、コミュニケーション論、哲学、認知科学などの知見を援用しながら分析した。そして、テキストの内部に、あるいは、テキストとテキストのあいだに看取されるさまざまなレベルの「反復」が、人と人ならざる存在の「コミュニケーション」の成立およびその言語化にとって看過すべからざる役割をもつことを、また、テキストを解釈する際の重要な手がかりとなりうることを、明らかにした。

本研究は、6章で構成されている。第1章では、研究の概要と目的、方法論、論文の構成について論じた。第2章と第3章ではエコクリティシズムやレトリック論などの先行研究およびテキスト分析のための理論的枠組みについてまとめた。それらを踏まえ、第4章で梨木のテキストを、第5章で石牟礼のテキストを、それぞれ分析した。第6章では、結論と残された課題について述べ、結びとした。

以下、第2章から第6章の内容についてまとめていく。

第2章では、文学における自然と人間の関係に焦点を当てる「エコクリティシズム」と呼ばれる文学研究（批評理論）について概説し、この分野で環境文学作品の言葉そのものや「レトリック」の問題を扱っている先行研究のレビューを行った。その結果、環境文学テキストの表現技法や表現形式について論じた従来の研究では、レトリック論や言語学などの言語研究の知見がほとんど参照されていないこと、この研究分野においては、「レトリック」という言葉は「修辞学」ではなく「弁論術（雄弁術）」を指す言葉として用いられることが多く、「環境文学」を「レトリック」という観点から論じる際には、テキストで用いられていることばの〈あや〉（「文彩」、「フィギュール」）のもつ意味や機能ではなく、そのテキストのもつ「説得」という力に目が向けられる傾向があることが浮かび上がってきた。第2章ではまた、「反復」という〈あや〉に着目しながら環境文学テキストを論じるという本研究の基本的な立場を明確にし、本研究で採用する方法論の有用性を示すため、古代ギリシャから現代までの「レトリック」の歴史を辿りながら「レトリック（論）」の特徴とその全体像を描出するとともに、エドワード・アビー、テリー・テンペスト・ウィリアムス、リチャード・ネルソンら、現代アメリカを代表する環境文学作家のテキストを、「反復」を手がかりに分析、考察した。

先行研究の批判的考察と具体的なテキスト分析を通して、「反復」という言語現象をよすがに環境文学テキストを読み解くことを試みる本研究が、従来のエコクリティシズムにおける「レトリック研究」とは一線を画すものであることを論じた上で、第3章では、第4章と第5章でテキスト分析を行う際に参照した理論的枠組みについてまとめた。まず、レトリック論の分野で「反復」がどのような〈あや〉と考えられてきたのかについて整理し、次いで、ロマン・ヤコブソンによる「反復」をめぐる言語研究の鍵概念である「等価性」、「類像性」、「詩的機能」、「交話的機能」について概説した。その際、梨木の小説に加え、環境文学作家としても知られる芥川賞作家の加藤幸子の小説、谷川俊太郎、寺山修司、俵万智などの詩的テキストから具体例を引き、それらを分析しながらそれぞれの概念について説明を行った。ヤコブソンの「等価性」と「類像性」に関する議論は人と人ならざる存在の類似関係を読み解く際に、「詩的機能」と「交話的機能」に関する議論は「反復」を伴いながら描き出される人と人ならざる存在の「コミュニケーション」を分析する際に援用した。また、詩的機能が、言及内容、送り手、受け手などを「多重化」させる働きをもつとしたヤコブソンの理論と、ハラルト・ヴァインリヒの独創的な時制論との親和性に着目した坂部恵の卓見を、テキストの分析および考察の



際の重要な理論的枠組みとした。

第4章では、第3章までにまとめた先行研究の知見を参照しつつ、梨木香歩の五つの作品（『西の魔女が死んだ』（1994年）、『ぐるりのこと』（2004年）、『蟹塚縁起』（2003年）、『エストニア紀行』（2012年）、『渡りの足跡』（2010年））の一部を分析した。ここでは、これらの作品に描かれた、人と人ならざる存在とのあいだの「コミュニケーション」の場面で用いられている言葉／〈言葉〉を、①人ならざる存在から人への〈言葉〉、②人から人ならざる存在への言葉、③人が〈うたう〉（あるいは〈かたる〉）自然の〈言葉〉、の三種類に分類し、①②③が紡がれたテキストに、5拍と7拍に分節可能な表現や、同一あるいは類似の音、語、語句のくり返しなど、〈うた〉らしさを感じさせる表現が頻繁に用いられていることを示した。さらに、〈かたり〉や〈うた〉という言語行為が、人と自然や、人と超自然の存在のあいだの「コミュニケーション」を特徴づけるという坂部の見解を敷衍し、①②③では、〈うた〉らしい形式的特徴をもつ〈言葉〉／言葉のやりとりが、当該の「コミュニケーション」が人と人ならざる存在のあいだの「コミュニケーション」であることを非明示的に表す役割を果たしていると考えられることを論じた。また、②の一部と③では、「反復」という〈かたち〉そのものが、その「コミュニケーション」において、「主体の二重化」——「他者」の〈言葉〉を発する主体の、〈当人であって当人ではない〉、あるいは、〈当人であるが「他者」でもある〉という状態——が生起していることを暗示していると解釈できることを示した。

石牟礼道子のテキストを取り上げた第5章では、主にテキスト間の「反復」、より具体的に言えば、「他者」の言葉／〈言葉〉のくり返しに光を当て、分析を行った。『あやとりの記』（1983年）の一部、『苦海浄土：わが水俣病』（1972年〔1969年〕）の一部、そして「草のことづて」をめぐる三つのエッセイおよび講演を分析した結果、次の三つのことが明らかになった。(1) 石牟礼のテキストでは、「他者」の言葉や〈言葉〉をくり返すことが、人と人とのあいだの、そして、人と人ならざる存在のあいだの「コミュニケーション」を成立させる鍵となっている場合がある。(2) 梨木のテキストと同じく石牟礼のテキストでも、人と人ならざる存在のあいだの「コミュニケーション」で用いられる言葉／〈言葉〉は、〈うた〉らしさを帯びる場合がある。(3) 「他者」の〈言葉〉の「反復」が、〈変身〉を引き起こす場合がある。以上の三点である。

第4章と第5章では、さらに、上述したテキスト分析の結果を、エコクリティシズムで議論されている交感論の知見を参照しながら考察した。坂部の言う「主体の二重化」

と、野田研一が展開する交感論で言うところの「主／客を撚り合わせる」という事態に、ともに、自他を同一視しない「他者観」と「コミュニケーション観」が認められることを指摘するとともに、「反復」が、「人間の自然化」をはじめとする、「他者」を「他者」たらしめたまま交わるという「コミュニケーション」（「ポスト・ロマン主義的交感」）を描く修辞装置として位置づけられることを論じた。加えて、「他者」の〈言葉〉をくり返すというふるまいが、エコクリティシズムが俎上に載せる、自然という「他者」との「想像的」な「相互行為」を立ち上げる上で要の役割を果たしうるということ、また、人ならざる存在を「主体」となす可能性を秘めていることを明らかにした。

最終章に当たる第6章では、本研究の成果をまとめるとともに、研究の課題と今後の展望について述べた。

本研究では、梨木香歩と石牟礼道子の環境文学テキストを詳細に分析することで、「反復」という形式的な〈あや〉が、単なる装飾や説得の具ではなく、人と人とのあいだはもちろん、人と人ならざる存在のあいだにもさまざまな「コミュニケーション」を生起させるとともに、その「コミュニケーション」の性質や、メッセージの送り手のあり方、送り手と受け手の関係性を非明示的に示す役割を担う場合があることを明らかにした。

本研究の学術的意義は、表現形式を手がかりとしながら文学テキストを読み解くという試みが、エコクリティシズムのみならず近年の文学研究においてもそれほど多く行われていないなかで、「反復」に着目して文学テキストを分析し、このような分析手法が文学テキストを解釈する上できわめて有用な方法論となりうることを示した点にある。また、修辞学系のレトリック論や言語学の分野で、メタファーやメトニミーなど「意味」に関わる〈あや〉と比べて議論されることの少ない「反復」という形式的な〈あや〉に注目し、それが人間の言語活動のなかでさまざまな役割を担うことを改めて示したところにも、本研究の意義がある。

環境文学に描かれた、人と人ならざる存在の「コミュニケーション」を形づくる言葉そのものに光を当て、それが、それぞれのテキストでどのような意味や機能をもつかを問うた本研究は、エコクリティシズムに新たな知見を加えるのみならず、「文学」が言語研究に重要な手がかりをもたらす可能性をもつことを、また、言語研究のさまざまな知見が文学研究にも援用しうることを示すことに成功したと言える。